
夜の少女はすぐデレる

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の少女はすぐデレる

【コード】

N7930G

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

筆者のMも夜の校舎では必ずツンデレな幽霊に出会います。

漆黒の闇に染まった空の下、俺は人気の無い路地を歩いていた。

深夜の路地は、静寂が支配していた。生ずる音といえば不気味な夜鳥のさえずりや、時々過ぎ去る車のエンジン音。

通行人は皆無だった。故に、こんな時間に歩いている少年を注意する人はいない。俺にとっては好都合であった。

肌寒い五月の風が頬を撫でる。少し行つて帰つてくるくらいなら、薄地の部屋着のままだったので、背中に感じる冷たさには身震いを禁じえなかった。

それでも、明日の授業に使う大切な宿題のノートを学校に忘れてきたのは自分の責任。さつさと持ち帰つてさつさと宿題を仕上げたさつさと眠りにつきたい。その目先の目的を叶える為、俺は歩を速めた。

そもそも何故こんなことになつたのだらう。真面目な俺は学校から帰つてすぐに宿題をしようと思つたのだが、そこで宿題を学校に忘れてしまったことに気付く。すぐに取りに戻ればよかったのだが、そこは色々と難しい事情があつて深夜に出かけることになつた。

賢い読者様なら、明日早く学校に行つて学校でやればいいだらう、と言つかもしれない。その意見はもつともであるが、朝は非常に苦手である。こんな時間まで活動していて、明日起きるのが怖いくらいだ。

だが、数学のハゲメガネは宿題の提出にとても厳しい。何としてでも宿題を仕上げないと、皆の前で一発芸をやらされるのである。

十五分ほど歩き、学校に到着。慣れぬ早歩きに足はちよつとした不満を述べるが、そんなのを無視して、俺は閉ざされた校門をよじ登つた。

頼り無さげな月明かりに照らされた校舎。ひっそりと寂しげに佇むそれは、昼の光景とは全く違う。生徒達の声で賑わう校庭も、こ

んなに静かになるものなのかと、しみじみとした文句を心の中で呟いてみる。不思議な感慨を覚えずにはいられなかった。

って、そんなことを言ってる場合ではない。早いとこ教室に侵入しなければならぬのだが、さてどうしたのか

この学校の警備、特に夜は、割と嚴重になつているのである。過去に学校金庫の盗難事件などがあつたそう、それ以来警備員の配置を多くしたそうなのだ。ちなみに校長の趣味で、警備員は皆頭に白いビニール袋を被り、AK47（エアガン）を装備している。どうしてそこまで知っているのかと問われれば、そんなことどうでもよいと俺は答える。

ところで、読者様が私めと同じ立場だったら、どういった経路で教室まで侵入するだろう。ちなみに教室は三階。鍵は自慢の針金ピッキング技術でどうにでもなる。

正面玄関は却下。あんさん、それだとゲノム兵並の身体能力を持った警備員に見つかつてしまう。CQC？ 一介の高校生にそんなこと言わないでくれ。

警備の甘い裏門があるじゃないか、だって？ 確かにそこは見つかる危険性は低いであろうが、生憎にも門が壊れていてピクリとも動かないのだ。俺の右腕に封印されている邪龍の力を借りればどうということないのだが、深夜はあいつの休息时间なのである。そこ、笑わない。

ならば、警備が甘くて容易に侵入が可能な側面通路を使うことにしよう。あそこならピッキングで開けられる扉もあるし、それに万が一見つかった際にも植え込みに紛れれば見つかることもないだろう。

高密度で並ぶ植え込みを飛び越し、俺は側面通路に着地した。

と、そこで気付く。

何だか背中が変だ。そして、異様に冷たい。

背中に手を回してみる。ふによんとした柔らかい感触が掌を襲った。

あれ？ 油断していると、首筋に生暖かい風（と表現するこ
としか出来ない）が、俺の全身に鳥肌を作らせた。

おそろおそろ振り返ってみる。そこには、一人の少女が俺の後ろ
に鎮立していた。

年の頃は俺と同じくらいだろう。薄地の白いワンピースを着てお
り、そこからは白磁のような肢体が覗けた。

均整の取れた顔立ちで、何より目が美しい。大きな瞳は、まるで
助けられることしか出来ない小動物を彷彿とさせる。

腰まで真っ直ぐ伸ばされた黒髪は、頭頂部に美しい天使の輪を描
いている。それが細身の身体と見事に調和して、子供っぽい美少女
を演出させていた。

「おい、ようやく気付いたかバカ」

鈴のような美しい声も、失礼な言葉にはとても似合わない。バカ
とは何だバカとは。馬鹿じゃなくてバカなところに愛らしさを感じ
るのはこの際どうでもよい。

眉根を釣り寄せながら言う彼女。妙な興奮を覚えた俺は変態と疑
われるのであるが、俺は変態ではない。それを誇示するかのよう
に、まともな質問をした。

「誰だお前」

「この地縛霊」

なるほど、地縛霊か。よくわかった。わからない読者はグーグ
ル先生で検索してください（これを一部ではググレカスなどと言っ
たりします）。

「で、その地縛霊が俺に何の用だ？」

幽霊だということは、不思議と簡単に認識出来た。俺の適応能力
がすごいのである。もう、俺ってばすごい。

そんな俺に、彼女は言う。

「お前がここに来たのだろう。お前が何の用だ」

「すまん、何でも無い。少し教室に忘れ物を取りに行くだけだ」

それだけ言うと、俺は扉の鍵穴に針金を差し込んだ。すぐに扉は

開き、俺は校舎の中へ入ろうとする。

しかし、それは少女に阻止された。

「あ、待て！ もう少しここにいろ！」

「どうして？ 早いとこ帰りたいんだ」

「あたしが寂しいだろうが！」

ふう……まったく面倒臭いことになった。

彼女は頬を紅く染めた。それを慌てて隠すかのように、彼女は顔をそらした。

「じゃなくて……」

数秒の沈黙の後、

「とにかく、お前の傍にいたい」

俺の手を、ギュッと握った。

「んなつ！？」

冷たい手が、俺の手首を刺激する。これはどういう状況なのだろうか。

「だから……いかないで」

そして、次に突然の冷たさが襲った先は、俺の股間であった。

省略されました。何度わっふるを書き込んでも続きは表示されません

(後書き)

拙作を通して私が伝えたいのは、提出は大事だよってことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930g/>

夜の少女はすぐデレる

2010年10月8日15時59分発行